

第5章 活用

一般の来訪者は、キトラ古墳のガイダンス機能を果たすキトラ古墳壁画体験館四神の館で修理され保管されている壁画を観察することができ、キトラ古墳の発見から調査、保存、整備に至る経緯や考古学的意義などを映像や陶板レプリカなどで学ぶことができる。また、古墳の現地では標柱と説明板、地形模型が設置されており、古墳の立地環境や規模、背面カットの様子を理解することができる。そして、乾拓板では壁画の残存状況や大きさ、タッチなどを実感してもらうことができる。

ここでは史跡の活用に直結する整備を行った乾拓板の活用や作成した整備関係のパンフレットについて記すことにする。

1 乾拓板を用いた史跡の活用

(1) 乾拓板の使用方法

使用方法は乾拓板に紙を当てて鉛筆等で擦るだけであるが、筆記具は8Bなどの濃い鉛筆や色鉛筆の他、全体が芯として使える商品が適当である。紙はコピー用紙などでも可能であるが、和紙、特に奉書紙は厚みがあって安定し、表面のざらつきの中に墨が固定されて載りが良い。図柄を擦り取っている時にずれないように固定する必要があるが、セロテープではなく、製図用のメンディングテープが紙への損傷が少ない。なお、設計段階から乾拓板の利用には紙と鉛筆の持参または売店での購入を前提とした。

(2) 講座の開催

奈良文化財研究所と公園を管理する公園財団飛鳥管理センターの共催で、壁画に関するミニ講演・遺跡見学・乾拓体験をする講座を設け、平成28年度は2回、平成29年度は4回行った。シアターで史跡整備や乾拓板、落款等に関する説明を行った後、現地見学・乾拓体験をし、シアターに戻って落款印を押して作品を完成させるものである。講師は史跡整備に関わった筆者らが務め、時間は90分、募集は20名、材料代を含めた参加料300円であった。

乾拓作品には篆書体の落款印のスタンプを用意した。右上の引首印には好古・平安・長楽・遊於芸、右下の押脚印に青龍・朱雀・白虎・玄武・天文・寅・午の壁画名、左下の姓名印の場所には白文で特別史跡キトラ古墳を用意した。参加者自身の落款印なども利用し、独特な作品を作って頂き、大人にも楽しんでもらうことを意図している。

また、天文図で外規の外側の東西には日月像が描かれているが、共に中は文様が残っていない。本来はそれぞれ三足鳥、蟾蜍などが描かれていたと考えられている。キトラ古墳壁画より古い時代のものである、日像は玉虫厨子、月像は天寿国繡帳があり、その意匠を真似たスタンプを用意した。また、奈良文化財研究所では藤原宮大極殿院南門前に大宝元年(701)の元日の朝賀で立てられた宝幢の模型を作製しているが、日幢と、蟾蜍・兎・月桂樹の整った月幢の文様も用意した。さらに、キトラ古墳周辺は渡

来人が多く住んだところであり、その被葬者を渡来系と考える研究者もいる。そのように考える参加者には高句麗の長川1号墳（中国吉林省集安市、5世紀中葉）壁画の日月像風のスタンプも用意した。自身の描く歴史的な文脈の捉え方によって失われた文様の復元も異なるものとなり、復元という行為の性格を実感して頂ければ幸いと考えている。

このように失われた文様を補うスタンプ一つ取り上げても、壁画の状態を理解してもらい、太陽黒点が起源であろう三足鳥の話や月の蟾蜍に関わる中国神話など大陸の文化を知り、残る伝世品や考古学資料から元の形を想像し、我が国の歴史や文化を学ぶ契機とすることができる。こうしたストーリーの小話をミニ講演のテーマにできるものと考えている。

他にテーマとしては飛鳥資料館で既刊の壁画に関する図録を活用し、四神の図柄の変遷や、十二支と建造物、西洋と東洋の星座などが考えられる。

今後は利用者および参加者の反応を見ながら活用方法に改良を加えたいと考えている。



Fig.191 遺跡見学会



Fig.192 ミニ講演



Fig.193 乾拓体験の様子



Fig.194 白虎の作品



Fig.195 落款印印影



Fig.196 日月の図像スタンプ



Fig.197 乾拓作品例（朱雀部分）

（3） 乾拓板のネットワーク

キトラ古墳壁画と似た内容を持つ高松塚古墳壁画については青龍と白虎の図像の乾拓板を平成 28 年度に作成した。奈良文化財研究所の平城宮跡資料館等で利用し、奈良への来訪者を飛鳥地域へも誘導する契機となることを期待している。

同時代の四神は薬師寺本尊の薬師三尊菩薩の台座にもあるため、図柄の乾拓板の作成により、奈良市内の薬師寺や橿原市内の本薬師寺跡も合わせた周遊などのための連携も考えられる。